

《寄稿論文》社会イメージの変容と構築主義の眼差し

著者	土井 隆義
雑誌名	年報筑波社会学
号	11
ページ	1-18
発行年	1999-09
URL	http://hdl.handle.net/2241/108014

《寄稿論文》

社会イメージの変容と構築主義の眼差し

土井 隆義

【1】イシュー・オリエンテッドな学生たち

筑波大学に職を得て8年が過ぎた。この8年間を振り返ってみると、社会学を専攻する学生の感受性が様変りしたことに気づかされる。最近の学生は、全体社会的な問題に対してあまり関心を示さなくなってきたようなのである。しかし、彼らに問題意識が欠けているというわけではない。個別具体的な争点に対しては強い関心を示すからである。このような変化が始まったのは、じつは1980年代初頭からだと思われる。しかし、90年代に入って、その傾向がとくに顕著になったように感ずる。

私は筑波大学の卒業生でもあるが、ちなみに、私が社会学類に入学した年度(1979年度)と昨年度(98年度)の卒業論文のタイトルをそれぞれいくつか拾い出してみよう。もとより、タイトルだけでは厳密な比較などできようもないが、社会学に対する学生の趣向の変化を知る指標の一つにはなろう。79年度には、次のようなタイトルが並んでいた。「エネルギー消費型社会の成立」、「〈個人と社会〉問題の現代的課題」、「戦後民主主義と政治文化の変動」、「政治的無関心の研究」、「労働者の社会保障」、「職業移動の研究」、「発展途上国と教育」、「都市政策の目的と主体」。対して、98年度には、次のようなタイトルが並んでいる。「〈ジベタリアン〉と都市」、「フリーターからのぞく現在の個人」、「シルパーマーケットにみる老人像」、「若者文化としての携帯電話」、「施設における擬似家族」、「ポケベルの普及からみた青年文化」、「住まいと家族」、「コミュニケーションの中の顔」。あくまで印象の域を出ないが、かつて見られた抽象的概念を操るタイプの卒論が姿を消し、個別具体的な素材を扱う卒論が増えている。

このような変化は、授業においても感ずることがある。筑波大学で社会学を専攻する学生は、経済学や法学なども含まれる社会学類に属するためか、文学系の学部へ属する他大学の学生とは異なって、実学への志向が強い。かつては、リベラル・アーツの色彩を前面に出した社会学の講義を行なうと、決まったように、「社会学って、いったい何の役に立つんですか?」と疑問をぶつけられたものである。しかし、このように実利的な効用を問う場合でも、議論の前提となる抽象的な社会は、ある種の実在としてイメージされていたように思う。すなわち、特定の集団や個人に対する効用を超えて、一般的に「社会を良くする」とか「社会の役に立つ」とかいった抽象的な思考が成立していたように思う。本来、社会学は、ほかの社会科学より後発だったということもあって、諸領域を包括し横断し関連づける学問として、すなわち全体的な視野を有する学問として構想されたという由縁を持つ。社会学の功利性を問う学生たちも、その前提には共感を示していたのである。

しかし最近では、そのような問いを投げかける学生がめっきり少なくなってしまった。このことは、最近の学生が実学志向ではなくなったといった単純なことではないようである。男女差別や老人介護など具体的な問題に対しては、むしろ積極的に解決策を社会学に求めようとしている。その態度は、あまりに直裁的で短絡的でさえある。察するに、現代の学生には、そもそも問いの前提であった抽象的な社会に実感が伴わなくなっているのではなかろうか。最近の学生にとって、社会とは、国家(=大きな社会)や学校(=小さな社会)などのように具体的にイメージできるものでしかありえないようである。たとえば、国家にしても、国会や内閣や省庁などのような具体的な機構の複合物として理解され、ナショナリズムや「想像の共同体」などといった発想には疎い。一方で、かなり粗い議論であるにもかかわらず、小林よしのりの『戦争論』のような全体志向の論考に飛び付きやすいのも、そこにある種の新鮮さを感じてしまうからではなかろうか。

それとほぼ時を同じくして、たとえば構築主義的な視座は、あらためて講義をするまでもなく、現代の若者にとって常識的な見方となってきたようである。かつては、構築主義的な見解を社会学の講義で採り上げると、従来の常識をくつがえす面白い考え方だとして、その視座に驚きを示す学生たちが少なからず

いたものである。すなわち、そこにある種の目新しさを感じていたようである。ところが、最近はその数もめっきりと減ってしまった。しかし、彼らから反応が返ってこないのは、構築主義的な発想に疎遠だからではないらしい。むしろ逆に、もともと彼らの身に馴染んだ見方であって、あまりにも当然すぎて意外性を何も感じず、したがって興味もわかないようなのである。「どんな社会問題も主観的な定義活動に由来するのだ」と声高に述べても、「そんなの当たり前じゃん!」というわけである。このような感性の広まりに拍車がかかったのも、やはり1990年代に入ってからである。私は、いくつか他の大学で非常勤講師もしてきたが、このような感性の浸透度が、各大学のいわゆる受験偏差値レベルと負の相関関係にあるらしいのも何やら示唆的である。

現代の学生は、社会そのものをある種の実在として抽象的に扱うことにはあまり関心を示さず、個別具体的な争点に依拠して議論を組み立てる傾向にある。同時に、構築主義的な見方には、社会学の教育を受けるまでもなく、元来から馴染んでいる。この2つの傾向はけっして偶然に起こったものではない。どちらも、社会に対する彼らのリアリティの変容を物語っていると考えられるからである。彼らは、抽象的な社会をイメージすることに困難を覚えるようになってきている。社会とは、もともと想像力の産物である。以上のような現代の学生の傾向は、社会に対する関心が薄れた結果だといって片付けられる性質の問題ではなく、そもそもその社会についての想像力の変質として扱われるべき問題なのである。同様に、社会学界における最近の構築主義の流行も、現代の若者のこのような心性を反映したものだといえるのではなからうか。

本稿では、現代の若者における社会イメージの変容という事態についてまず考察を行ない、その知見をもとに、社会学界における昨今の構築主義の流行という現象の社会的背景について検討を加えてみたい。

【2】現代の若者における社会イメージの変容

阿部は、次のように述べ、これまでの日本に社会の実体はなく、あるのは幻想にすぎなかったと主張する。「欧米の社会という言葉は本来個人がつくる社会

を意味しており……欧米の意味での個人が生まれていないのに社会という言葉が通用するようになってから、少なくとも文章のうえではあたかも欧米流の社会があるかのような幻想が生まれたのである。特に大学や新聞などのマスコミにおいて社会という言葉が一般的に用いられるようになり、わが国における社会の未成熟あるいは特異なあり方が覆い隠されるという事態になったのである」[阿部, 1995:28-9]。もともと社会とは私たちの想像力の産物である。その意味では、欧米と日本とを問わず、社会とは実在ではあっても実体ではない。しかし、阿部の主張から敷衍できるのは、同じ想像力の産物であったにしても、とりわけ我が国の場合には、その抽象度が高かったということである。そして、この抽象度の高さは、後に述べるように、実在としての社会に対するリアリティを容易に崩壊させていく伏線ともなっているのである。

「社会」という言葉と対比して、我が国においてもっと身近で具体的な手触りのあった言葉は「世間」である。しかし最近では、「社会」の抽象度が下がってきたために、「世間」との差異が不鮮明になりつつあるようである。たとえば、宮原は、「社会」と「世間」の違いを学生に問うたところ、ある学生は「社会はNHK特集、世間は民放のワイドショー」と答えたと言っている[宮原, 1998a:162]。この表現は、フォーマルな「社会」とインフォーマルな「世間」という語感の違いを的確に言い当てており、その意味ではまことに巧みな表現だといえよう。しかし同時に、最近の若者の社会イメージの変質の一端をも語っているように思われる。ここでは、社会も世間も、等しく具体的なレベルで扱われているからである。宮原は、これを受けて、具体的な感觸の希薄だった翻訳語としての「社会」が我が国に土着化するにつれて、かつて持っていた「魔術的な宝石箱効果」を失ってきたからだろうと述べている。

しかし、「社会」に対する語感の変化の背後には、たんに言葉のレベルにとどまらない日本社会そのものの変質が潜んでいるようにも思われる。端的に言えば、最近の我が国では、超自我的な社会の拘束力が低下してきていると考えられるのである。その影響力を最も強く受けているのは青少年であろう。市橋は、昨今の青年層における精神病の軽症化の原因として、社会からの強力な超自我供給の衰えを指摘している[大平・市橋・福島, 1998]。社会から押し付けられる「あるべき姿」という重荷と格闘する若者が減ってきたのである。もはや社

会は、自我の前に立ちはだかる大きな壁、あるいは自我にとっての葛藤の対象ではなくなっている。ちなみに、このことは、昨今のナラティブ・セラピーの流行とも無縁ではない。ひとは、自らの物語を紡ぎ出すことで主体になることができる。かつては、その手本となるべき大きな物語が社会に存在し、それを模倣することでひとは容易に主体になることができた。あるいは主体であるかのように錯覚することができた。しかし現在は、そのような大きな物語が社会の側に用意されておらず、模倣すべき対象を喪失してしまっている。すなわち、ナラティブ・セラピーの流行は、大きな物語を喪失した人びとが、自らの物語を求めてあがく心の渇きを現している。このように、「社会」に対する語感の変化は、社会そのものが具象化してきたことの表れだともいえる。

19歳の永山則夫が強盗殺人事件を起こしたのは、遡ること30年前の1969年であった。彼は、獄中で執筆された『無知の涙』の中で、自分の罪の起源を「資本主義的生産様式の社会体制」に求めた。一方、2年前の97年に殺人事件を引き起こした19歳のある少年は、TV局に送った手紙の中で、自分の罪の起源を「ナイフの登場するTVドラマの影響」に求めている。両者の手記を比較した大塚は、30年を隔てた2つの手記の間に、社会に対するリアリティの大きな変貌をみる〔大塚、1998〕。自分の責任を他に転じようとする幼さを示す点ではどちらも同じだとはいえ、罪を転化する対象はかけ離れているからである。かつて存在を実感しえた抽象的な社会は姿を消し、代わって具体的な「TVドラマ」にしか実在を感じるができなくなってしまったようなのである。これは、手記の書き手個人の想像力の問題ではなからう。彼らは、同世代の感受性を共有して書いているはずだからである。その意味では、それぞれの世代に共通のリアリティを表明している。そうでなければ、かれらの手記が大きな反響を呼ぶことはなかったはずである。

宮台は、最近の若者に見られるこのような心性を「脱社会性」と名付ける〔宮台、1998〕。これは、現代の若者の社会的性格といってもよい。彼らのあいだで記録的な大ヒットとなったTVアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』の主人公、碇シンジは、かつての『宇宙戦艦ヤマト』や『機動戦士ガンダム』などの主人公とは異なり、社会や正義を守るために闘ってはいない。そもそも登場人物のほとんどは等身大の身近な他者だけであり、守るべき社会など最初からリアリ

ティをもって描かれてはいない。シンジは、自らの存在証明の希求先として闘いに巻き込まれていくだけである。このような社会性の欠落したドラマのヒットは、社会に対する彼らの感性の変化を的確に語っている。かつて成立しえた抽象的な社会や、それを前提とした社会正義の観念は、もはやそのリアリティを失っているのである。

一方、現代の若者の日常の振る舞いに目を転ずると、他者との関係に異常に気を使いながらも、互いにけっして深入りしようとはしない姿勢が目立つ。むしろ、表層的な関係を滑らかに保っていくためにこそ、互いの対面維持に異常に気を使っているようである。大平の表現を借りれば、最近の若者はホットな関係よりもウォームな関係を求める傾向にある〔大平、1996〕。一人で生きるほどの強さは持ち合わせていないが、かといって濃密な人間関係は暑苦しく重たく不快である。表面的な接触を適度に持ちつつ、しかし互いの内面には立ち入らない。完全な無関心ではないが、かといってあからさまな関心は示さない。それが相手への思いやりであり、心地好い人間関係なのだという。職場でも家庭でも、かつて人気のあった熱血漢はうっとおしいと敬遠され、いわば体温の低いクールな人間のほうが好まれる。恋愛や結婚においても、全人格的な繋がりを志向せず、生活圏の一部が重なっているだけでよいとされる。江藤淳の死は妻に殉じたものだと評されても、おそらく今の若者には実感が伴わないだろう。大平は、ペットとして爬虫類を好む人びとが増えているのも、この傾向と無関係ではなかろうと推測する。ペットは、家族の一員として擬人化される。飼い主に愛嬌をふりまく動物よりも、無表情な動物のほうが心が安らぐのである。このような若者の姿から連想されるのは、G.ジンメル (Simmel, G.) の指摘した都市的パーソナリティである。親しい友人や家族の関係が、あたかも都市の雑踏を行き交う人びとの関係のような様相を帯びてきている。

では、実際の公共空間における彼らの振る舞いの方はどうなっているのだろうか。本来、都市生活をおくる見知らぬ人びとは、互いにけっして無関係なのではない。そこには、ストレンジャー・インタラクションとでも呼ぶべき関係が成立している。かつてS.ミルグラム (Milgram, S.) は、匿名性の世界の中にも、不関与規範に互いに関与しあっている人びとの姿があることを見出した〔Milgram, 1970〕。見知らぬ人びとは互いに無関心なのではなく、無関心を装っ

ているにすぎない。見知らぬ他者に関心を示さないというのは都市生活における儀礼の一つであって、それぞれのプライバシーを守るために私たちは協力しあっており、その努力によって匿名性は維持されているのである。その意味において、見知らぬ人びとの間にも歴然たる関係が成立している。しかし、最近の公共空間においては、自分の欲望の赴くままに振る舞う若者の姿がよく目につく。そこには、不関与規範に互いに関与しあうべき見知らぬ他者があたかも存在していないかのようである。電車の中でよく見かける光景のなかの若者たち、たとえば携帯電話での会話に喚声をあげて熱中し、床に座り込んでの化粧に熱中し、ベタベタといちゃつく男女の有り様などを目にすると、彼らにとって同じ場所に居合わせているはずの他者は完全に関心の外にあり、なんの意味も持っていないのではないかと思わされる。認識はされているにしても、せいぜい風景の一部にすぎないのだろう。

かといって、最近の若者には公共のマナーが欠如していると非難するのはあまり的を射ていない。そもそもマナーが成立するためには、他者が他者として認識されていなければならない。しかし、最近の若者にとっては、成立しうる他者の範囲がきわめて狭くなってきているのであって、この点において、彼らの振る舞いは、民事法の概念を借りれば、他者の存在を無視した「悪意」の結果などではなく、他者の存在に無知なる「善意」の結果だとも言いうるのである。したがって、自らの振る舞いを注意されれば、さして反抗を示すこともなくすぐに行爲を正す。現代の若者の意識を調査した齋藤は、自分に関わってくる範囲内での他人の公共的なマナーには、彼らも非常に敏感に「ムカツク」で反応すると述べている[齋藤,1998:37-39]。この「ムカツク」は、自分に迷惑がかかるという条件内での鋭敏な感覚であって、たとえば自分の並んでいる行列に他人に割り込まれるとムカツクが、となりの行列で割り込みがあってもムカツク対象にはならないという。

もちろん、いくら他者の成立する範囲が狭くなったからといって、他者の全てが風景になってしまったわけではない。見知らぬ他者が他者としてきちんと認識される場合もある。しかし、いったん他者が成立すると、今度は先に述べた不関与規範がむしろ強力に働くのである。したがって、電車内で立っている老人に「席をゆずりましょうか？」と声をかけるのは、私たちにとっては当

然のマナーのように思われるが、若者にとってはマナー違反なのである。なぜなら、老人の側には声をかけられたくないプライドや事情があるかもしれない、それを無視して一方的に声をかけることは、相手のプライドを傷つけたり内面に土足で踏み込んだりしかねない行為だからである。それは、さきの大平の表現を借りれば、まさしく「やさしくない」振る舞いなのであり、声をかけないことのほうがマナーなのである。彼らは、もし老人が席をゆずってもらいたいのなら、老人からそう申し出るはずだと思っているし、その場合には喜んで席をゆずるといふ。困ったり悩んだりしていそうな人に対しては、手を貸したり相談にのったりとむやみやたらに節介をやくより、むしろ相手から申し出があるまではそっとしておいてあげるというのが「やさしい」思いやりであり、対人関係におけるマナーのようである。

現代の若者の眼前から「他者」がフェード・アウトしつつある。身近な他者との関係性は表層化し、見知らぬ他者との関係性は成立しにくくなってきている。宮原の表現を借りれば、総じて他者の「他」性が強まっている [宮原, 1998b]。これは、日常世界の狭窄化と言い換えてもよい。私たちの日常世界は、他者との繋がりや連鎖によって構成されているからである。このことは、先に述べたような社会の具象化とけっして無縁ではない。なぜなら、他者に対する想像力の欠如は、抽象的な社会に対するリアリティの崩壊を前提としているからである。抽象的な社会に対するリアリティとは、等身大の関係をこえた超越性に対する想像力のことであり、社会の実在性に対する実感、あるいは手応えのようなものである。他者との関係が成り立たない（＝自分との関係を画定できない）ということは、関係性を支えるための共通基盤が天蓋として存在していないということである。私たちは、同じ地平にいない人間とは関係を作れない。関係性の欠落は、社会性の欠落の帰結なのである。ベラ (Bellah, R. N.) はこう述べている。「他者との道徳的な意見の相違に直面したとき、それを解きほぐすに足るだけの共感もなく、その前提となる価値観の一致もないとすれば、私たちは彼らの前から引き下がるしか手がないということである」 [Bellah et al., 1985=1991:90]。

【3】構築主義的世界観のインプリケーション

現代の若者たちのあいだでは、社会の具象化と、それに根差した世界の狭窄化が進んでいる。社会学というフィールドにおいて、とりわけ若手の研究者のあいだで構築主義的な見方が自明視されたり、あるいは多くの共感を得たりしているのも、このような社会イメージの変容とけっして無縁ではなからう。社会学界もまた下位社会の一つだからである。以降ではその関係をみていきたい。

一般に、科学理論の発展は、そのディシプリンに内在的な要因によってだけでなく、むしろそれを現実化させるような社会環境の変動によっても準備される。さらにその社会的な流布にいたっては、論理的必然性とは別の要因によるところが大きい。社会環境が、科学の理論的発展とその浸透の素地を準備するのである〔村上, 1997〕。冒頭近くで、最近には構築主義的な視点を当然のこのように受けとめる学生がほとんどであることを指摘したが、近年の構築主義の流行は、社会問題論における理論的発展の帰結としてだけでなく、そのような視点に共感しうるような心性の一般化としても捉えることができよう。

構築主義は、問題とされる社会状態の客観的研究という社会問題論の伝統的方法を批判し、問題を定義する人びとの活動（＝クレイム申し立て活動）の研究を提起してきた。構築主義においては、社会問題に関する人びとの定義活動の外部に、客観的な社会状態を想定してはならないとされる。「社会問題とは、何らかの想定された状態について苦情を述べ、クレイムを申し立てる個人やグループの活動である」という主張には、それまで客観的な実在と看做されてきた社会問題が、じつは主観的に想定された状態にほかならないという含意がある〔Spector and Kitsuse, 1977=1990:119〕。構築主義は、①問題をめぐる人びとの現実構成の営みに焦点を定める、②何が問題なのかは定義する人びとの観点からしか捉えられない、といったインプリケーションを有しているのである。

構築主義の母胎となったのは、1970年代のアメリカ合衆国であった。当時を振り返ってみると、構築主義的な経験研究を可能にした第一の条件は、価値の多元化という社会状況だったといえる。すなわち、当時のアメリカ合衆国には、社会問題についての了解が共有されたものとして与件化されることなく、何が問題なのかは問題があると主張する人びとの定義活動に依存するといった理解

に実感が伴うような社会環境が備わっていたのである。構築主義的な観点による社会問題の研究が、社会統制の研究と合わせ鏡になってきたのはそのためである。

一方、1960年代アメリカ合衆国の出自であるラベリング論も、構築主義とほぼ同様の視座をすでに持っていたのであり、その面からみれば構築主義の前身だといってもよい。しかし、ラベリング論は、社会問題の定義作業を行なう場としての統制活動に分析の照準を定めていたにもかかわらず、まだ社会を与件として捉える傾向が強かった。そのことは、逸脱とはレッテル貼りの結果であるというパースペクティブを採用しながら、同時に「われらアンダードッグの側に立つ」と主張したベッカー (Becker) の言明にも鮮明に表れている [Becker, 1967]。したがって、逸脱者は「過社会化された存在」として、すなわち社会に対する受身的な弱者として理解されやすかった。クレイム申し立て活動を行ないうるのは、あくまでも問題を統制する側なのであって、逸脱する側もその活動の主体たりうるとはとても考えられなかったのである。統制活動を起点とする逸脱の増幅モデルの出発点となったE.レマート (Lemert, E.) の「第二次的逸脱」の概念はその典型例である [Lemert, 1967]。この概念は、統制側からサンクションを受けた逸脱者の社会的アイデンティティがネガティブに変容し、それが後の行動を規定するという側面に注目したものであった。逸脱者は、消極的・受動的に態度を変容させていかざるをえない存在と看做されていたのである。

ラベリング論者の多くが「与件としての社会」から逃れられなかったのは、現在のレッテル貼りは正当ではないという社会的義憤から出発しつつも、その義憤が彼ら自身の主観的判断でしかないのではないかとの危惧を払拭できなかったからである。対して、構築主義は、社会問題の研究者が「社会を変えていこうとする人びと」の存在に現実直面することから出発した。これが、構築主義的な視点をもたらした第二の条件である。草柳が指摘するように、「クレイム申し立てを研究対象とすべきという主張は、そうした対象が、社会の中で明らかに見えているという状況を映している。……彼らは、価値の語彙を操り、社会の『問題』を告発し、人びとに道徳的要求を突きつける、いわば『強い』自己主張、『強い』言説を展開する。彼らは『逸脱』的アイデンティティを積極

的に掲げ、自己の要求とその正当性を堂々と主張することによって、社会のあり方を、自分たちの言葉の力によって変えていくことができるという信念に基づいて行動するような「強い」主体として特徴づけられる」[草柳, 1998:22-3]。構築主義は、社会に対して堂々と異議申し立てを行なう人びとの存在を前提に登場したのである。「スティグマからアイデンティティ・ポリティクスへ」[Anspach, 1979] や「同化から反乱へ」[Weitz, 1984] などといった表現がその辺りの事情を端的に語っている。

自ら進んでカミング・アウトする逸脱者の登場と彼らの社会観は、構築主義の出発点において、その理論構築に大きな影響を及ぼした。たとえば、構築主義の主張者であるJ.キツセ (Kitsuse, J.) は、レマートの「第二次的逸脱」を踏まえて、自己を積極的に肯定する主体による逸脱への能動的なコミットメントを「第三次的逸脱」と呼んだ [Kitsuse, 1980]。このことは、ある行為類型やその実践を逸脱であると主張することによって社会問題を産出する統制側のみならず、自らの行為を脱社会問題化しようと反撃に打って出る逸脱者の側もまた、クレーム申し立て活動の主体たりうると認知されるに至ったことを意味する。クレーム申し立て活動で使用される言語的資源は、決して平等にではないにせよ、統制側にも逸脱側にも開かれている。そう言うような状況が現実の社会に準備されたのである。たとえば、薬物中毒をめぐる言説の一部であるマリファナの含有成分やその化学作用に関する知識は、マリファナ喫煙を社会問題化しようとする人びとにとっても、あるいは脱問題化しようとする人びとにとっても、それぞれが利用しうる言語的資源である。そもそも、私たちがマリファナの化学作用を問題にするのは、その酪酊反応によって喫煙者の行動を説明しようとするからであり、マリファナの含有成分なるものは、その見地からある基準を用いて初めて認識されうるものである。すなわち、マリファナの化学作用もまた想定された状態の一つにすぎず、もし今後、新しい基準が提案され、それを用いて新しい含有成分や化学作用が発見されたり、あるいは従来の化学作用が否定されたりすることがあれば、その時点で私たちの主観的定義による現実は塗り変えられることになる。その可能性を開く鍵は統制側と逸脱側の双方が握っているのであり、統制側だけが掌中に収める「真実に関する知識」が唯一に存在するわけではないのである。

構築主義的な視点に立つなら、社会とは、私たちの主観的定義によって構築されたものであり、したがって私たち個々人の相互作用の集積にすぎないことになる。私たち個々人の活動を超越し、個々人の活動を拘束する普遍的な社会はもはや存在しない。ここにおいて、社会は、いわば主語から目的語へと転じたことになる。言い換えれば、社会は、もはや変えがたい与件などではなく、明らかに操作可能な対象となったのであり、「社会的な問題 (society's problem)」は、「問題としての社会 (society as problem)」へと組み直されることになったのである。かつてラベリング論は、逸脱行為の原因を逸脱主体の側にはなく、統制主体の側へ求めようとした。それとほぼ等しい視座転換が、ラベリング論の段階ではまだ積み残されていた社会観においても行なわれたのだといえる。そして、ここで留意すべきなのは、このことが、超自我的な社会の絶対性がすでに低下していることを示唆している点である。構築主義の理論的枠組は、現実の社会の変化を反映しているのである。吉見は、次のように述べている。「エスノグラフィーを書くことは、単にすでにある文化を書き取っているのではない。同時に書くことを通して文化を語られうるものとして構築してもいるのである。したがってあらゆるエスノグラファーは、自分がいかに聞き、見たかだけでなく、いかに書いているのかに自覚的にならざるを得ない。……書くことをめぐろうとした自己意識が、文化概念そのものの変化と対応しているという論点も重要だ。今日のエスノグラフィーの多くは、文化を『不意に現れてくる何か、議論の余地のあるもの、両義的なもの』と見なしている。今日、文化は不安定な流動性の中にあるものとしてしか見るができないのである」[吉見, 1999]。

【4】脱社会的な社会的性格と構築主義の流行

超自我としての社会の拘束力の低下は、抽象的な社会に対する想像力の崩壊にそのまま直結しているわけではない。両者の間には大きなギャップがある。しかし、このギャップは、すでに述べたように、構築主義が導入された1990年代の我が国においては、すでに埋まりつつあったのである。90年代以降、そも

そも我が国の社会問題の研究者の多くは、逸脱主体の側からのクレーム申し立て活動に直面するという経験をさほど経てきていないはずである。我が国には、70年代のアメリカ合衆国に見られるような、社会に対してクレーム申し立て活動を行なう強い主体はあまり見当たらない。むしろ、我が国の社会問題の研究者が現実のフィールドに見出すのは、クレーム申し立てにまではとても至らない、いわば私事化された人びとの世界である。行政機構に生活保護を求めることもなく、ひっそりと餓死することを選ぶ極貧の人びと。焼き討ちなどの暴動やデモに訴えることもなく、追い立てられるままに路上の片隅でひっそりと暮らすホームレスの人びと。自らの自由裁量の範囲を超える問題を抱えつつも、けっして社会に対して異議申し立てをしない人びとが増えている。

我が国で積極的に経験調査を行なってきた草柳は、セクシャリティの問題を抱えるある女性の語りを分析して、こう感想を述べている〔草柳、1998:34〕。「彼女が念頭においている『幸せ』は、自分と自分に関わりのある他者、という比較的小さな圏域における個人的な幸せであろう。社会全体に価値が実現すること、ではない。さしあたって、価値の社会的実現というより、自分と身近な他者との関係からなる生活の快適さが大切にされているように思われる。」この「彼女」は、レズビアンという既成のカテゴリーに自分を当てはめることをも拒否しようとする。すでに社会的に構築されているカテゴリーによって自らを語ることで、本来は多彩なはずの自分のアイデンティティが矮小化される危険性を身をもって感じているからである。自分をセクシャリティという特定の要素に還元することなく、むしろ曖昧な主体のままでいることを大切にしたい。既成のカテゴリーへの違和感として語られる言葉の裏にあるのは、このような感性であろう。そして、この感性の背景に、脱社会的な指向性を見出すことはそう困難なことではない。

我が国に多く見られるのは、アメリカ合衆国のように社会と対峙する逸脱者ではなく、社会から切り離されて内閉化する逸脱者である。そこには、反社会的というより、むしろ脱社会的な世界が展開している。このような状況にもかかわらず、いや、むしろこのような状況であるがゆえに、我が国の社会問題研究においては、本家のアメリカ合衆国での評価を超えるほどに構築主義が大きな地位を占めるようになり、むしろ研究者の側から積極的にクレーム申し立て

活動を「掘り起こす」ような研究姿勢さえ見受けられるようになっている。この背景には、抽象的な社会によりも諸個人の活動に注目するという構築主義のスタンスに親近感を覚えるという研究者の側の事情があると考えられる。構築主義が、とりわけ若手の研究者に対する吸引力を強く発揮しているのは、その親近感を支える脱社会的な指向性が一般に若者に強いからではなかろうか。『ソシオロジ』編集委員の橋本は、最近の大学院生は学会誌に投稿して他流試合をするよりも、自分たちの身内の雑誌に投稿するほうを好むようだと言っているが〔橋本, 1999:148〕、これもまた同じく脱社会的な感性の現れといえるかもしれない。

かつてのラベリング論を理論的に純粋化していけば、構築主義に行き着くことは論理的な必然であったろう。構築主義的な視点は、ラベリング論においては未だ中途半端だった視座転換を貫徹し、論理の一貫性を追求した結果だともいえる。しかし、日本の構築主義者の関心は、アメリカ合衆国での「科学的」関心に比べて「倫理的」関心に偏っていると指摘されるように〔Nakagawa, 1995〕、ポスト・ラベリング論の文脈だけでは、とりわけ我が国の構築主義の流行を語ることはできないと思われる。社会統制活動に注目したかつてのラベリング論や、その亜流であるニュー・クリミノロジーが、反社会的な感性を体現していたとすれば、諸個人による認識活動に注目する構築主義、とりわけ我が国のそれは、脱社会的な感性を体現しているといえるのである。

構築主義の見解によれば、私たちが客観的な実在と看做してきたものは、じつは私たち個々人の主観的定義の集積にほかならない。したがって、もし仮に「人びとの主観的定義は客観的な実態と必ずしも対応していない」とある社会学者が認識したとすれば、その判断もまたその個人の主観的定義だということになる。すなわち、彼は、人びとが客観的な実態と想定している主観的定義と、彼自身が客観的な実態と想定している主観的定義とが食い違っているということ述べているにすぎない。たとえば、中世ヨーロッパにおいて大きな社会問題であった魔女の脅威が当時の人びとの主観的定義であったとすれば、魔女は実在するはずもないから当時の人びとの勝手な思い込みでしかなかったのだと主張する現在の私たちの認識も、また同様にある一つの主観的定義にほかならない。主観的定義の外部に客観的状态は想定されえないからである。かくして、

構築主義においては、社会認識に関する社会学者の特権的地位も否定されることになる。市井のくびとよりも社会学者のほうが社会認識に長けているなどというのは「専門家のイデオロギー」にすぎない。

しばしば機能分析で使われるような「潜在的な社会問題」という言い方は、構築主義的な観点からすれば、社会学者の傲慢さの現れであり、本来は形容矛盾な表現である。なぜなら、社会問題とはクレームによって主観的に想定された状態であって、そのクレームの背後に客観的状态を想定できないのだとすれば、クレーム申し立て活動が成功しなかったという認識が仮にあったとしても、それをもって潜在的な社会問題が顕在化されなかったとまでは言えないからである。研究者が主張できるのは、社会問題が構築されなかったという事実のみである。その範囲を越えてしまえば、研究者の価値意識による社会状態の専断に陥ってしまうことになる。クレーム申し立て活動を行なう当事者たちが認識できないような基底的な真実の存在が隠蔽されていると主張する社会学者の活動もまた、クレーム申し立て活動の一つにほかならないのである。

構築主義のこのような立場は、では社会学者はいかにしてあるクレームを経験世界から分節化できるのか、という問題に突き当たることになる。そこにはやはり社会学者の専断が働いているのではないか。いわゆる存在論的ゲリマンダリング（OG）問題である [Woolgar and Pawluch, 1985]。学史的にみれば、構築主義が理論的に洗練されていく初期段階に生まれた暴露派は、クレームの背後に客観的状态を想定し、その客観的状态とクレームとのズレを「歪んだクレーム」として告発しようとした。このような立場は、クレーム以外の客観的状态を社会学者はいかに認識しうるのかという批判を受け、クレーム以外に社会問題の根拠はありえないとする現在の厳格派が誕生したのである。しかし、その厳格派とて、クレームという経験世界の事実を切り取ってくる作業を行なう以上、このOG問題から逃れることはできないのではないか。これは、構築主義は果たしてその視点を貫徹しうるのかという構築主義の喉元に突きつけられた本質的な問題である。かくして、OG問題は、現在の構築主義における最大の争点となっている。

しかし、ここで問題にすべきなのは、その解をいかに求めるかではない。社会認識に関する社会学者の優越性を否定し、ひいてはOG問題に敏感たらざる

をえない構築主義的な社会観である。社会学者に社会認識の優越性を認めることができないのは、かつてE.デュルケム (Durkheim, E.) が主張したような認識の対象たる社会的事実、すなわち諸個人の相互作用を超えた實在が存在すると実感されえないからではなからうか。構築主義は、一般に社会規範と看做されているものも、それがあつた種の言説である以上、けつして与件ではありえず、その社会の人びとの定義活動の結果だとする。すなわち、社会にではなく諸個人の活動に還元される。そこに見出されるのは、もはや抽象的な社会などではなく、諸個人の相互作用に還元されうよふな具象的な社会である。かくして、社会を認識する際に、社会学者であるか否かの相違は本質的な意味を持たないことになる。このように、構築主義的な視点は、社会学が対象とすべきは人びとの相互作用そのものであり、けつしてそれを超える實在についてではないといふ確信によつて支えられている。

我が国における脱社会的な指向性は、経験的調査の対象たる市井の人びとと同様に、それを研究する側の感性をも規定している。研究者もまた市井の一員だからである。普遍的で抽象的な社会を認めないといふ構築主義的な視点に対する研究者の共感、ここから生み出されていく。かくして、現代の我が国においては、クレイム申し立てによつて社会と対峙した経験などないといふ一面では構築主義を成立させえないと思われるよふな状況が支配的であるにもかかわらず、そのよふな状況をもたらした脱社会的な指向性を研究者の側も共有しているがゆゑに、むしろ構築主義が流行しているといふ皮肉な現象を見ることができふ。冒頭で述べたように、最近の大学生に構築主義的な視点がいわば常識化してきているのも、また同様の文脈で語ることができよう。彼らは、若手研究者よりもさらに若いがゆゑに、脱社会的な傾向はさらに強いと思われる。構築主義的な視点が、すでに共感を通り越して常識化している所以である。彼らの自我は、自らの内在的衝動に依拠して構築されるよふになつてきており、従来よりも社会に対する依存度は低くなつていふ。少なくとも主観的にはそのよふに感じられるよふになつていふのである。

我が国における構築主義の流行やその視点の常識化は、現代の若者の脱社会的な指向性と密接に関係している。もちろん、構築主義の隆盛は、本稿のよふな切り口から語りつくせるものではあるまい。本稿でも少し触れたよふに、ポ

スト・ラベリング論としての理論的必然、経験的調査研究に応用しうる間口の広さ、あるいは見田が述べるような日常世界の虚構化という現実認識〔見田、1995〕、さらに、穿った見方をすれば舶来の理論に対する信仰など、さまざまな要因が相互に絡み合って今日に至っていると思われる。しかし、それでも、本稿で指摘したような要因は、それら諸要因の中核に位置するにちがいない。抽象的な社会に対するリアリティを喪失した現代の若者の社会観は、構築主義という眼差しの基底にある社会観とまさに合致しているからである。したがって、脱社会的な指向性は、前節で指摘したような構築主義のインプリケーションに対するセンスを高めるはずなのである。すなわち、①問題をめぐる人びとの現実構成の営みに焦点を定めるというインプリケーションは、「社会とは私たち個々人の活動でしかない」という実感によってサポートされるだろうし、②何が問題なのかは定義する人びとの観点からしか捉えられないというインプリケーションは、価値の判定基準を自己の内的衝動にしか置かない彼らの心性によってサポートされるだろう。本家のアメリカ合衆国においては、未だマイナーなアカデミックの地位にあるにもかかわらず、それを凌ぐほどに我が国で大きく羽ばたいた構築主義という眼差しは、現代の日本の若者における社会的性格の鏡なのである。

〈文献〉

- 阿部 謹也 1995 「『世間』とは何か」講談社。
- Anspach, R. R. 1979 "From Stigma to Identity Politics: Political Activism Among the Physically Disabled and Former Mental Patients," *Social Science & Medicine* 13A:765-773.
- Becker Howard S. 1967 "Whose Side Are We On?," *Social Problems* 14(3):239-247.
- Bellah, Robert N. et al. 1985 *Habits of the Heart: Individualism and Commitment in American Life*, Univ. of California Press. = 1991島菌進・中村圭志訳『心の習慣：アメリカ個人主義のゆくえ』みすず書房。
- 橋本 満 1999 「編集後記」『ソシオロジ』43(3):148.
- Kitsuse, J. I. 1980 "Coming Out All Over: Deviants and the Politics of Social Problems," *Social Problems* 28(1):1-13.
- 草柳 千早 1998 「『問題経験』の語られ方：クレイム申し立て研究の歴史的な性格と現代」『社

- 会学年誌」39:19-36, 早稲田社会学会。
- Lemert, E. M. 1967 *Human Deviance, Social Problems, and Social Control*, Prentice Hall.
- Milgram, S. 1970 "The Experience of Living in Cities," *Science* 167.
- 見田 宗介 1995 『現代日本の感覚と思想』講談社。
- 村上 陽一郎 1997 『新しい科学史の見方』日本放送出版協会。
- 宮台 真司 1998 「(脱社会化)する子供たち:『キレる中学生』の心象風景」『毎日新聞』2月16日(朝刊)。
- 宮原 浩二郎 1998a 『ことばの臨床社会学』ナカニシヤ出版。
- 1998b 「言葉に聴く現在:『他者』と『大人』」『ソシオロジ』43(2):81-86.
- Nakagawa, N. 1995 "Social Constructionism in Japan," *Perspectives on Social Problems* 7: 295-310.
- 大平 健 1996 『やさしさの精神病理』岩波書店。
- 大平 健・市橋 秀夫・福島 章 1998 「現代日本人の心性と社会的異常現象をどうみるか」『日本医師会雑誌』119(9):1355-1370, 日本医師会。
- 大塚 英志 1998 「少年とナイフ:移行対象領域論」『中央公論』113(5):268-279, 中央公論社。
- 齋藤 孝 1998 『「ムカツク」構造:変容する現代日本のティーンエイジャー』世織書房。
- Spector, M. and J. I. Kitsuse 1977 *Constructing Social Problems*, Cummings. = 1990 村上直之・中河伸俊・鮎川潤・森俊太 訳『社会問題の構築:ラベリング論をこえて』マルジュ社。
- 吉見 俊哉 1999 「対象の中から記す語り口の方法論は(書評:ジョン・ヴァン＝マーネン著『フィールドワークの物語:エスノグラフィーの文章作法』)」『朝日新聞』4月18日(朝刊)。
- Weitz, R. 1984 "From Accommodation to Rebellion: Tertiary Deviance and the Radical Redefinition of Lesbianism," J. W. Schneider and J. I. Kitsuse eds., *Studies in the Sociology of Social Problems*, Ablex Publishing Company, pp.140-161.
- Woolgar, S. and D. Pawluch. 1985 "Ontological Gerrymandering: The Anatomy of Social Problems Explanations," *Social Problems* 32:214-227.

(どい たかよし/筑波大学)